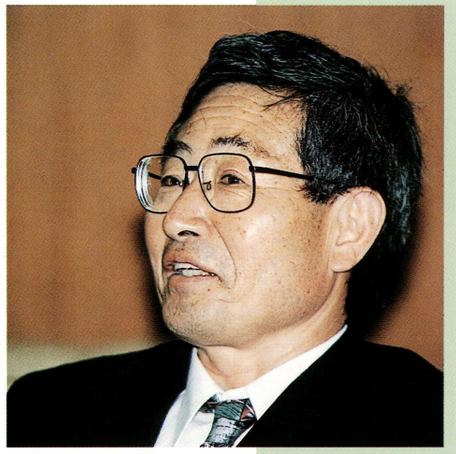
ボランティアが大切なとき



Hatsuhiko Mizuki

神奈川新聞社社長
水木初彦

Yoshiko Okamura

神奈川県共同募金会
事務局長
岡村良子

赤い羽根は福祉を拡める手段

岡村　本日はお忙しいなかありがとうございます。まず始めに共同募金をどう思っていらっしゃるかをお尋ねしたいのですが。

宮下　僕はまったく福祉の問題は素人でしたが、共同募金会の理事を引き受けてから、初めて分かったことがたくさんあるんですよ。それまでは、赤い羽根にお金を出しても、自分が出したお金がどこへいっているのか全然分からないから、正直言ってあんまり関心がなかったんですね。理事になって、募金が配られる先を見せていただくと、これは大変大事な仕事だなと思いました。今でも募金する方の中には、まあ、お付き合いとして募金するかとか、町内会から集めに来るからするかという程度で、そのお金がどこへいくのか分からないために、それほど関心を持てないという人が多いんじゃないかと思いますけど、その辺どうなんでしょう？

水木　そうですねえ、まず最初に共同募金がどう映るかというと、募金という形の助け合い運動の原型みたいなもんじゃないかと思いますね。ただ、そのお金がどういうふうに生きているんだというところが、一般の人たちにはいまひとつ見えないというか、あるいは浸透していないという、そういう面があるんじゃないでしょうか。

宮下　募金してくださる方のお気持ちや表情がもっと見えて、そのお金がどこで生かされているか、もっと具体的に見えてくると、いい関係が生まれるんじゃないかと思うんですけどねえ。

水木　そうですね。

岡村　私どもでは、募金に併せて寄せられるお便りを愉しみに読ませていただいています。ときには、こんなやりとりもありました。前年はご夫婦お二人のお名前で送ってこられたのに、今年はおひと方の名前になっていたので、その方に、「どうなさいましたか」と、お便りを差し上げましたところ、折り返し、「ごめんなさい。つい手を抜いて主人の名前だけにしました」というふうにお便りをくださいました。そういうつながりが全ての県民の方たちとできれば素晴らしいなあと思っているんですが……。

水木　そんなふうになさると、便りを受け取った人も、単にお金を出したという関係だけじゃない、もっと強い絆のようなものを感じてくださるでしょうねえ。

経験によって理解深まる介護

Nobuo Miyashita

元朝日新聞編集委員
神奈川県共同募金会
理事
宮下展夫

岡村　お便りの中には生きている限り共同募金への寄附を続けますというようなものもだいぶあります。本当は一人ひとりにお便り差し上げたいんですが、なかなかそれができないもどかしさというのはありますね。でも、どうなんでしょう、赤い羽根は募金活動自体が福祉のＰＲ活動というふうに考えていけばそれでいいのではないかとも思いますが。

水木　そういう意味では、赤い羽根というだけで国民は分かりますよね。福祉の活動を応援するのが目的の運動なんだなあと。金額だけでない、もっと広い広がりを持った活動であり、運動だということですね。

岡村　世の中が変わっています。福祉も例外ではありません。介護保険制度がもうすぐスタートします。介護保険については、どうお考えになっていますか。

宮下　難しいですね。みんな関心は持っているんだけども、新聞を読んでも、テレビの説明を聞いてもよく分からないところがある。でも必要だという認識はほぼ共通しているんじゃあないですか。

水木　私は大丈夫なのかとか、保険料だけ納めてもその給付を受けられないんじゃないかとか、そんな心配があると聞きますが、細かな実施上の問題点というのはあるんでしょうけども、制度というか、仕組みそのものは必要だというのは、国民的なコンセンサスと言えるのではないでしょうか。若い人にはあまりピンとこないかもしれませんけどねえ。

岡村　だんだん年を取ってくると親の介護が始まります。そして、その後自分はどうするんだろうと考えるようになり、介護保険で老後を安心して暮らしていけるのかと……。

水木　介護の対象となるような状態にならないほうがむしろ個人としては幸せですよね。いつまでも、自分でちゃんとやっていける、お世話にならないでも大丈夫。万が一なったときには、しかし、やってもらえるという、いわば安心感を保障される、そういうふうに考えればいいんじゃないかと思いますね。そういうように割り切れることじゃないかなあと思いますね。

岡村　人間、最後を自分の家で迎えられたらどんなに幸せでしょう。

宮下　昔は自分の家でというのが普通だったんですがね。今はもうみんな病院に入ってしまいますけど。

水木　まあ平均寿命が五十、六十の頃と、八十前後の今との違いですよね。

宮下　介護保険が、必要っていうのは頭では分かるんですけれども、やっぱり人間その場になってみないと分からないことがたくさんあるんですね。私の母は八十七歳で亡くなりましたけれども、その少し前から、介護のことが問題になって、それでホームヘルパーの方をお願いしたんですけれども、お願いするまでホームヘルパーの組織がどこにあるのか、どういうことをやってくれるのか、全然知りませんでした。その場になってみないとなかなか理屈で教えられてもピンとこないっていうところありますね。

水木　介護を体験しますと、ヘルパーさんのありがた味が分かりますよ

ね。私も宮下さんのように両親のためにホームヘルパーの巡回をお願いしまして、だいぶ助かりました。

宮下　ホームヘルパーをお願いしたときに、初めて分かったんですが、ヘルパーさんにも食事を作るのが得意なヘルパーさんと、それから老人の話し相手が得意な人と、得意な分野が皆さんそれぞれあるんですね。母の話し相手の上手な方と、それから食事の得意な方とを、日にちを変えて来ていただくようにしたんですけど、たいへん助かりました。こういうようなこともやっぱりそういう場に当たってみないと分からないですね。

水木　そうですね。

宮下　ホームヘルパーについて制度的なことをいくら説明されても、そこからは具体的なことってなかなか出てこないんですね。そういう具体的な情報が、うまく伝わるようなシステムがあると、それはいいと思うんですけどね。

水木　民間の部分の情報がちょっとアクセスがしにくいとか、そういうことなんでしょうかね。

宮下　地域の新聞は、厚生省の説明よりも、地域の具体的な状況を知らせてもらう方を、もっとやっていただきたいと思いますけどね。

岡村　神奈川新聞を拝見いたしますと、地域の老人ホームがどういう活動をしているか、地域のボランティア活動にはこんなものがあるという記事がたくさん載っていますね。

宮下　そうですね。神奈川新聞は、かなり熱心にやっていますね。

水木　以前に比べて、そういう社会的ニーズが高くなってきたので、それを紙面にも反映させなければということなのです。神奈川新聞は地元紙ですから、特にそういう方には力を入れなければいけないなという考えでやっています。

岡村　いろんなボランティア活動を取り上げていただければ、困ったことができたら、そういう記事を頼りにボランティアをお願いすることができますね。

宮下　ボランティア活動が、こんなに日本で盛んになるとは思わなかったんですけどね。

水木　阪神大震災が起きた時に、一挙に吹き出た感じがしましたね。それで国民の間で、ボランティアに関心が無かった人も関心を持つようになったんですね。

わき上がるボランティア

宮下　それまではアメリカの災害でよくボランティアが活動しているのをテレビなどで見て、どうして日本は、こういかないのかと思ったら、ちゃんと日本でもやってる方がいらっしゃる。それをわれわれ知らなかっただけなんですね。阪神大震災や石油が海岸に流れついたときなども、まったく自然発生的に災害の現地にたくさんの人が行った訳ですよね。だれが号令かける訳でもなくってね。

水木　そうそう。日本の社会も思っていた以上に成熟してきていたんだなと、そういうふうに思いましたよね。

岡村　ボランティアも盛んになって、最近は定年退職した男性の方たちが、あっちこっちにグループを作って、車の運転ができるから、障害を持つ方のお出かけなどをたすける移送サービスなど、ご自分の特技を生かした活動をなさっていますが、それがもっと盛んになればと思っているんですが、ボランティアの情報が少ないんでしょうかしら……。

宮下　確かに情報も少ないんでしょうね。ヨーロッパなんかでは、定年になったからこれからはもうお金のための仕事はしない、ボランティアをするんだっていう人はかなり多いようですね。日本もだんだんそういう時代になりつつあるんじゃないでしょうか。

水木　あまり肩肘はらずにさりげなく、自分のできる範囲で、というようなボランティアですね。新聞なども、楽しいボランティアといった観点から取り上げるといいと思いますね。

岡村　ボランティア活動がいっぱいあちこちで発生して、時間のある方が、「じゃあ、ちょっといってみようかな」というようになれば、隣のお年寄りはどうしているかしらと、気にとめていただける。共同募金の心って、その辺のところから始まっていると私は思っているんですが…。

宮下　共同募金は、元々自発的なものでなきゃいけない訳でしょ。別に上から号令かけられたから、いやいやお金出すものでもないはずだから。やっとそれが定着してきたんですかね。

岡村　高齢社会といわれています。福祉はますます大切なときを迎えています。長時間にわたり有意義なお話を伺ったのですが、紙数の関係でかなり割愛しなければならなくなりそうです。ご参加くださった水木さん、宮下さんにはお詫びのしようもございませんが、どうぞお許しください。